



日本にはプールが必要だ 海に囲まれたこの国日本とプール

Special Interview 佐野和夫×鈴木大地



古橋廣之進氏の記念碑

戦争が終わって、再び水泳ができるようになった時、
“魚になるまで泳ごう”と思った。
私の目標は世界一になることだった。
だから人の何倍もの練習を苦しいとも思わなかった。
人間というものは、大きな目標を持って一筋に努力し、
工夫し、苦しみにも耐えてこそ、
大きく成長していけるものだと思う。
私は水泳から多くのことを学んだ。

『泳心一路』は、そんな私のここにひびく言葉である。

古橋廣之進

国立スポーツ科学センター敷地内に建立された
故古橋廣之進氏の石碑に刻まれたメッセージを掲載させていただきました。

営業所のご案内 プールのことならお気軽に

ヤマハ発動機株式会社 プール事業推進部 TEL 053-594-6512 〒431-0302 静岡県湖西市新居町新居3078

東京営業所

販売課 TEL.03-3454-2434
〒108-0023 東京都港区芝浦3-5-39 田町イーストウィングビル3F
東北販売課 TEL.022-301-7102
〒981-0933 宮城県仙台市青葉区柏木1-2-45 フォレスト仙台ビル5F
中部販売課 TEL.052-218-4366
〒460-0003 愛知県名古屋市中区錦1-17-26 ラウンドテラス伏見 4F

西日本営業所

販売課 TEL.06-6268-0520
〒541-0052 大阪府大阪市中央区安土町3-4-16 船場オーセンビル4F
九州販売課 TEL.092-472-7815
〒812-0007 福岡県福岡市博多区東比恵3-13-10 スピリッツ福岡D

<http://www.yamaha-motor.jp/pool/>



受け継ぐ安心、 重ねる信頼

地元の2地区の学校が合併し、昭和49年に誕生した浜岡東小学校。新校舎の完成から6年後の昭和54年9月に待望のプール施設が完成しました。プールは、その前年に発売が開始されたばかりのヤマハFRPプール・スクールシリーズ。それから31年のあいだ、温暖な静岡県でも最も南の、自然豊かな土地に育つ子どもたちの水泳学習を支えてきました。記録的な真夏日の続いた夏を最後に、老朽化した施設は、最新で最も安心なプールにリニューアルを計画。32年目からの新たな歴史は、再びヤマハFRPプールが受け継いだのです。



静岡県 御前崎市立浜岡東小学校プール
■25mプール
プールサイズ:25m×13m 水深:0.9m-1.1m-0.9m
水面積:325㎡ 材質:FRP
■小プール
プールサイズ:13m×6m 水深:0.7m
水面積:78㎡ 材質:FRP

2 特集：海に囲まれたこの国日本とプール
日本にはプールが必要だ。

11 YAMAHA INFORMATION

13 水中運動核心論 Presented by 宮下充正

14 Relay talk Vol.13 水夢人 泉 正文氏

SPECIAL FEATURE

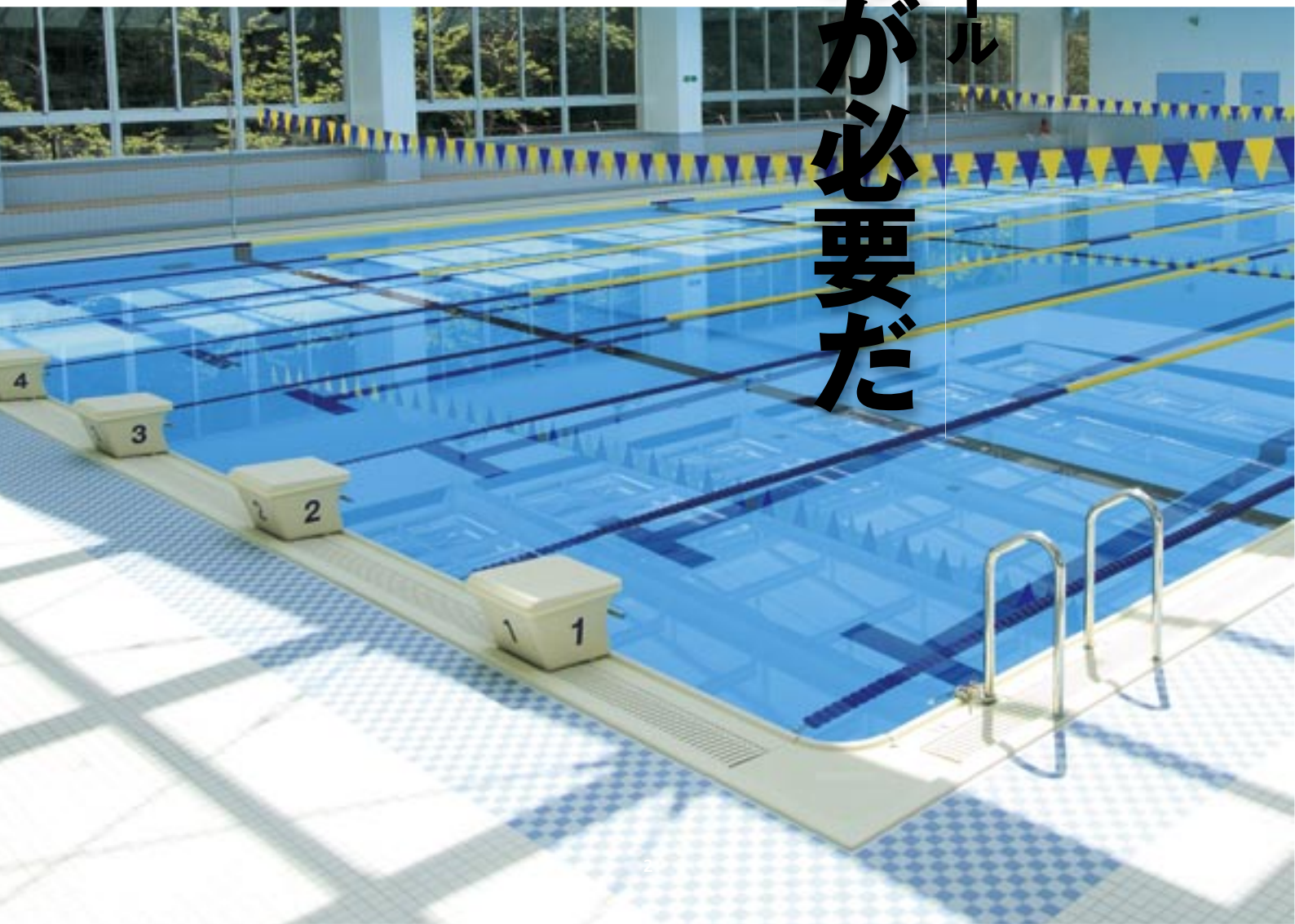
【特集】

海に囲まれたこの国日本とプール

日本にはプールが必要だ

日本人とプールとの関係は、江戸時代にも遡る。その時代、プールは「水練場」と呼ばれ、教育鍛錬の施設として発祥している。一方、武芸に端を発する「水術」は、明治時代に「日本泳法（古式泳法）」と呼ばれ、海軍や学校などで広まていく。やがて、こうした訓練の場が、広くプール施設に求められていったのは、周囲を海に囲まれた特殊な環境にある日本特有の文化とも考えることができる。海上保安庁の「海上保安学校」でも、「遠泳」の訓練をプールで実施している。また、「水上安全法」に沿った訓練をプールで施すことで、海上での泳力向上を身につけ救助に役立てているという。プールは、この国にとって大切な訓練の場なのだ。そこには、ヤマハのプール技術が大きく寄与している。全国の訓練用プール施設の施工実績を、今、検証する。

写真／海上保安学校





訓練用プール施設の実績が示す確かな技術力

古くから日本には、訓練用のプール施設が存在していた。それは、周囲を海に囲まれた日本特有の事情が大きいのかもしれない。
今、あらためて訓練用プールの意味を考える。



ているものの、元来、日本のプールは「海への出発点」として、訓練を目的として発展してきた背景があるのだ。

■FRPの特性が活きる訓練用プール

ひとくちに訓練用プールと言っても、実に様々な目的がある。学校体育での基礎水泳力を身につける施設から、競技力向上を目的とした国際基準のプール施設、さらには水深5メートルにもなる特殊訓練用の施設まで、訓練の成果が大きな影響力を持つほど、その設計・施工には安全・安心な技術が求められる。

ヤマハが提供するプールは、その技術ベースに最適素材といわれるFRPを採用し、耐震性や耐候性に優れたプールとして多くの採用実績を誇っている。

FRPは、特にその素材特性として金属のように錆びない点、また、軽量でありながら高強度を備え、自由な成形性で対応力があること。そして塗装がはがれることもないなどの低劣化特性を発揮してランニングコストに優れているのも大きな特徴。

また、スクール用プールでは、文部科学省が推奨する耐震基準をクリアする性能を維持することで、国の交付金制度とも連携したリニューアル計画を実施している他、地震に強い耐震工法を確立することで、安定した強度の確保を実現している。そして、既存施設の躯体を活かし、短期間、省資源によるリニューアル工法により、最先端のエコシステムプールとして魅了させるなど、プール施設のトータルメーカーとして数多くの実績とノウハウを備えている。

■数々の実績が示す有形・無形の技術力

このような技術を背景としたヤマハFRPプールへの信頼は、特殊な訓練用途プールの設計・施工で実証されている。

海上保安庁の教育機関である「海上保安学校」（京都府舞鶴市）や「福岡県警第2機動隊」や「岩手県警機動隊」などの警察庁のプール施設。さらには、「小樽水産高等学校」など、海との関連が強いプール施設において、数々の実績がある。

その他では、福岡での世界水泳選手権が開催された特設プールや、J・I・S（国立スポーツ科学センター）シンクロプールなど、競技用または競技力向上を目的とした訓練施設などにおいて、関係者から高い評価を受けている。

これらの中でも、「海上保安大学校」のプールのように、水深5メートルにも達する施設では、水圧対策などの高強度・高



都道府県	市町村	納入先	モデル
北海道	旭川市	旭川陸上自衛隊	25m×15m
青森県	むつ市	海上自衛隊大湊航空隊	50m×19m
岩手県	滝沢村	陸上自衛隊岩手駐屯地	25m×15m
宮城県	仙台市	陸上自衛隊霞目駐屯地	25m×15m
山形県	東根市	防衛庁（陸自）神町駐屯地	25m×15m
埼玉県	さいたま市	陸上自衛隊 大宮駐屯地	25m×15m
神奈川県	横須賀市	防衛庁横須賀基地（潜基隊）	25m×15m
新潟県	佐渡市	航空自衛隊 佐渡分屯地	25m×11m
静岡県	浜松市	航空自衛隊浜松基地	50m×15m
京都府	舞鶴市	海上自衛隊舞鶴教育隊	50m×19m
兵庫県	神戸市	海上自衛隊阪神基地隊	50m×11m
奈良県	奈良市	航空自衛隊幹部候補生学校	50m×15m
山口県	岩国市	海上自衛隊岩国基地	50m×19m
徳島県	小松島市	小松島海上自衛隊	50m×11m
福岡県	小郡市	陸上自衛隊小郡	25m×15m
長崎県	佐世保市	海上自衛隊佐世保基地	25m×19m
沖縄県	那覇市	航空自衛隊那覇基地	50m×17m

〈納入実績の一部〉

■江戸時代にも存在した「プール」

日本には、古くから川や海で水遊びをする習慣があった。時には豊かな自然が残る長閑な光景の清流で水に親しみ、ある時は波の静かな海岸で海水浴を楽しむ。子どもの頃に仲間や家族で、そうした時間を過ごした経験が誰にでも一度くらいはあるはずだ。

それと同時に、水に親しむ場としてプールという存在も大きな位置を占めていた。私たちは、いつもプールで水について学び、水泳の訓練をしながら、川や海への憧れを身近なものにしていたのかもしれない。

日本で最初のプールとされているのは、江戸時代の藩校のひとつである日新館（会津藩）にあった「水練場」が有名で、その他には、長州藩校の明倫館にもあったことが確認されている。当時、最も権威のあったこれらの学府で水泳を学ぶ機会があったことは、非常に興味深い。

■日本のプールは「海への出発点」

陸上生活を基本としている人間にとって、水中で過ごすためには、泳ぐ訓練が必要になる。そのための施設として、プールが果たしてきた役割は大きい。とりわけ学校の体育で学ぶ水泳は、競技力の基礎づくりはもちろん、水難事故を抑止する機会にもなっている。また、近年行われている着衣水泳なども海や川でのレクリエーションの安全性を確保する目的として重視されている。

今でこそ、アミューズメントやアクアウェルネスを目的としたプール施設が登場し

精度をはじめ、水質を維持するための水の循環システムなど、経験的に獲得している技術特性が大きな鍵を握っている。

今日、ヤマハのプールが、訓練用施設として多く採用されている背景には、このような有形・無形の技術財産を保有しているからに他ならない。日本人特有の海とプールとの関係性を理解し、プールの必要性について長年に渡って研究してきたヤマハだからこそ、特殊なニーズにベストな答えを出すことができるのだ。

日本にはプールが必要だ。それは、疑うことのできない事実なのだから。

■防衛省等納入実績

ヤマハFRPプールは防衛省をはじめ、警察庁、消防庁など国の各機関の訓練用プール施設への納入実績を持ち、その数は全国で40基以上の物件数を誇ります。

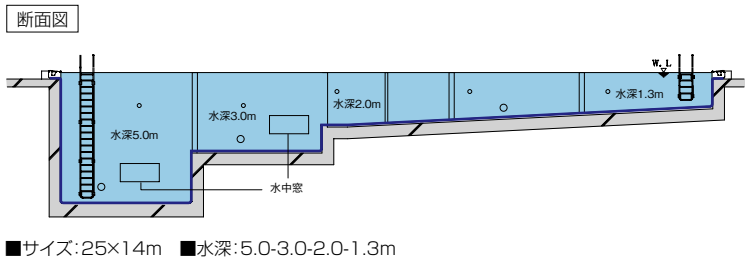
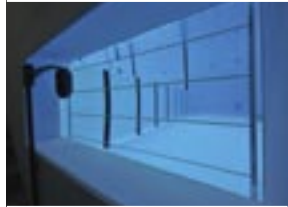
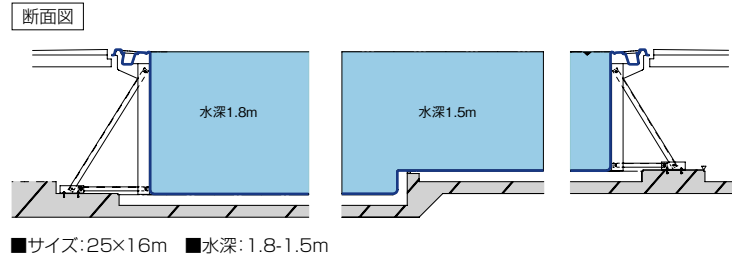
治安、領海、人命 そして海を守る人を育成する。

1 舞鶴海上保安学校

「海の危機管理」を任務とする海上保安庁の教育機関である海上保安学校。海上保安業務に必要な知識・技能を教授し、合わせて心身の鍛錬を図ることを目的とした教育機関。今年3月新たなプール施設が完成した。



A. 以前は更衣室などの設備も無く、校舎で着替えていったん外を水着のまま100メートル以上歩いて、プールまで行かなければならない施設だった。
B. 水泳競技会などでプールサイドに座りやすいように段差を設けている。また、プールエリア内はまぶしさが軽減されるよう白を基調にした。
C. 入水時の体感温度を安定させて訓練に専念できるよう雨風をできるだけ防げることで、維持管理などにも配慮し、シートでプール上面を被い、できるだけ屋内施設に近い構造を検討した。



2 海上保安大学校

広島県呉市の海上保安大学校は、将来の海上保安庁の幹部候補となる職員として採用された学生に対し、海上保安業務に必要な高度な学術や技能を教授し、あわせて心身の練成を図ることを目的として設置された海上保安庁の教育機関です。潜水訓練用プールは、学生が水泳など授業で使用するほか、潜水士を目指す研修生が訓練を行なうため使用するためのプールです。旧プールは海上保安官の活躍を描いた映画「海猿」にも登場しました。旧プールは、老朽化のため今年6月にリニューアルが行われました。

泳ぐ基礎と自信を身につける

事務部会計課 施設係長 東 信之さん

以前のプールは、昭和40年代に建てられた鉄製で、サビが発生し、底板もへこみがひどく、毎年塗装や補修を行わなければならぬ状況でした。大きさは25メートル7コースで、水深は長辺両サイドが1・2メートル、中央が1・4メートルでした。
また、プール本体だけの施設で、更衣室などの設備も無い状況でした。近年は海上保安庁全体で女性の進出を約3割の水準で目指しており、実際にも女子学生が増えている状況ですので、更衣室が無いことは、重要な課題となっていました。

新プールの計画は、平成20年2月ぐらいからはじまり、翌21年8月に着工しました。当然、更衣室を備えた施設で、当初は全面水深1・5メートルを予定し、計画の途中で、長辺側の6メートル分を水深1・8メートルとし、立ち泳ぎの訓練がしやすいように変更しました。

使い勝手のよい形状であることやランニングコースも考え、比較検討した結果、プールはFRP製を採用しました。雪などを含め寒暖が厳しいこの舞鶴で、耐候性の高いFRP材質であることは重要なポイントでした。

完成したプールは、率直に「きれいなプールだ」と思います。プール本体の色を標準色より明るくしてもらったことなどは図面や見本ではわかりにくかったのですが、実際に出来上がってみると、良い印象でとても気持ち良く使える施設だと思っています。

わが校のプール施設の目的は、「海上での泳力向上」にあります。このプールはその目的のコンセプトがすべて集約されています。近年は映画やテレビドラマの影響もあって海上保安に関する認知が広がっています。「泳力を鍛えて、救助を行う」。それぞれ能力のこととなる生徒に対して、基礎訓練に十分なプールが完成し、これからのわが国の海上保安を任務とする人材育成に貢献すると思っています。

訓練課教官 井上千鶴さん

当校では毎年7月に3マイル(約5・5キロ)の遠泳を行います。プールの使用は毎年6月からを予定し、その練習をプールで行います。遠泳は平泳ぎで2列縦隊の隊列を組み、お互いのパディを意識し、体調等を確認しながら泳ぎます。

7月に入ると海上での訓練も行います。海上は風や波、うねりがあり、漂流物もあります。そうした状況で弱者を見つけ、助ける。救助する人を見失わないための飛び込み技術など、「水上安全法」に沿った訓練も行われます。

遠泳もこうした海上での安全確保の訓練で立ち泳ぎ、パディ確認の際の拳手などを練習し、なにより体力的に楽に長時間泳げるようになることが必要な技術なのです。プールの練習にあたって最初は、平泳ぎができない、あるいは泳げないという学生もいます。また、海で泳いだ経験が無いという学生も少なくありません。3マイルを泳ぐことは、しっかりと泳法技術を備えていないと不可能ですし、完泳できれば「何があっても対応できる」という自信も養われます。

また、クロールと平泳ぎの50メートルのタイムを計測する検定も行っていますし、授業以外の時間や休日、夜7時までには当直をたて、自主トレや自主練習も行っています。

海上保安官になるために「泳ぐ技術」はなにより重要なことです。その基礎的な練習にすばらしく立派なプールが完成しうれしく感じています。



左／井上千鶴さん、右／東信之さん

人命救助の技術を訓練

Interview

海上保安大学校

当校のプールでは、学生約180名の水泳訓練に加えて潜水士を育成するための研修が行われます。

当校の研修は14人で行われ、年2回、計28名を2名の教官が中心となって担当します。プールでの訓練は、底にステンレスのカゴを転覆船のモジュールとして沈め、それを使つての救助訓練などを行います。

それらの訓練は空気ポンプを使用し、前半をプールで、後半を海で行います。プールではスキンダイビングとスクーバダイビングの練習、そして海を想定したメニューの研修を5月から6月と、

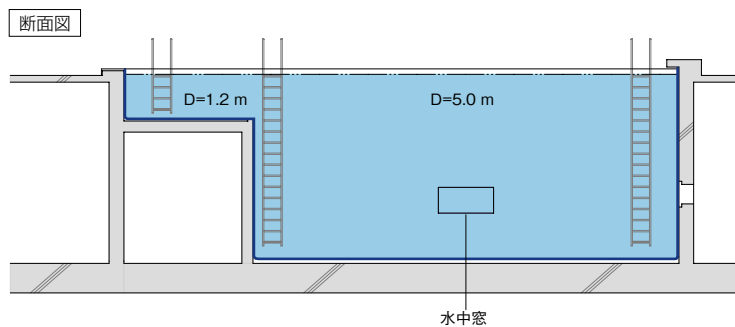
9月から10月に2回行われます。新しいプールは、以前のものと大きさや水深は同じですが、大きな違いは、材質がFRPであることと、水中窓が設置されたことです。そのおかげで、水中での訓練や、水泳の授業でも状況が把握でき、泳力や技術の向上や、生徒個人のレベルや改善点の確認がわかりやすくなりました。また安全面でもとても有効に機能しています。

これまでのプールは数年に1回塗装していたのですが、今回のFRPプールの改修により、塗装のはがれがなくなり、さらに水の入替えやろ過機の負担など、メンテナンスの面でも良い効果が現れてくると期待しています。

目的にあったプールの技術。

1 福岡県警第二機動隊

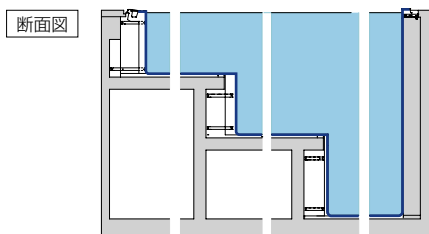
福岡県内にはふたつの機動隊が編成され、第一機動隊は北九州市を拠点とし警察活動に迅速かつ的確に対応するため、実践的な訓練を行っている。プールは海などでの遭難者の捜索や救助における訓練用として、水深5メートルの深さを備えたものとなっている。



■サイズ: 15×8m ■水深: 1.2-5.0m

2 岩手県警察本部警備部機動隊潜水棟

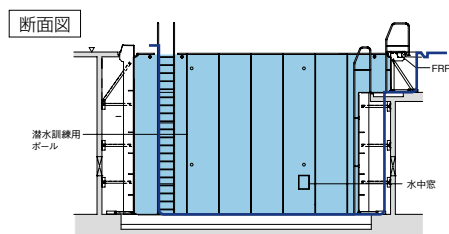
東側を太平洋に接した岩手県にあって、平成21年2月に新設完成した潜水訓練用のプール。1・5、3、そして5メートル、と3段階の水深構造にしたことで、救助や捜索のための、様々な技術を鍛錬しやすい環境を各水深で設定可能となっている。水難救助訓練はバディを組み、ゴーグルに目隠しをし、視界不良状態をつくるなどして行なわれている。



■サイズ: 11.9×6.15m ■水深: 1.5-3.0-5.0m

3 北海道小樽水産高等学校

平成15年3月に寒冷地の水産高等学校用として、常温のプールを室内に設置。水深5メートルの潜水プールは、海洋漁業科の海洋コースの潜水実習に向けた訓練用として、主に2年生の授業で使用。25メートルの競泳用プールは、最深部が1・5メートルで、東小樽海岸での臨海行事に向けた練習にも活用している。



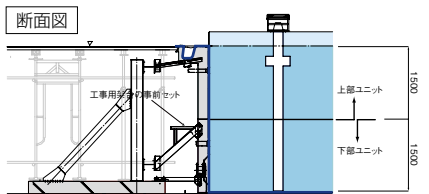
■サイズ: 8.0×35m ■水深: 5.0m

ヤマハFRPプールの技術と水深強度。

4 3750トンの水を有した世界水泳福岡2001特設プール（※1）



2001年に開催された第9回世界水泳選手権大会福岡2001では、メインプールを含む3基のプール建設を行なった。メインプールは大型多目的ホール「マリンメッセ」に50メートル×25メートル・水深3メートルの「水夢21」を設置した。3メートルの水深をもつプールの水の重量は約3750トン。この水圧に耐え国際公認の精度を備えたヤマハの特設プール技術は、大会とともに世界から大きな注目を浴びることとなった。

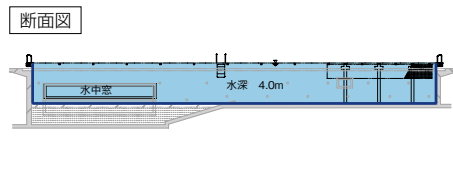


■サイズ: 50×25m (国際公認プール) ■水深: 3.0m

5 日本のシンクロ競技力向上を目指したJSSシンクロ用プール（※2）



2001年に東京北区赤羽にオープンした、「国立スポーツ科学センター」。国内トップアスリートの育成環境として、スポーツと科学と医学の領域から捉えた研究が行なわれている。ここには、競泳用50メートルプールとシンクロ専用の30メートル×25メートルプールが設けられている。シンクロ用プールの水深は、当初2・5メートルと4メートルの2段水深で建設されたが、2009年に利便性やメンテナンス性の向上を図り、全面4メートルの水深に改修された。



■サイズ: 30×25m ■水深: 4.0m

■まとめ

スペシャリスト養成の目的に合わせたプール機能。

プール利用の目的が明確であり、習得すべき技術もはっきりとしている。今回訪問した施設は、その目的が明確なだけに、それぞれ特徴的な機能や設備をあわせもったプールとなっている。競泳やシンクロにおけるプール利用と決定的に異なる点は、まず海や川などを想定した訓練の場であること、そして最終的にはボンベなどを装着し、あらゆる障害を想定しての訓練となることだ。「人命を救う」。海上保安庁だけでなく、各県警の機動隊もその到達点は同じである。

そして、自らの命や隊員同士の命を守るための技術も不可欠となる。救助作業について考えれば、日常と懸け離れた水中で、場合によっては陸上以上の精度とスピードでの対応が要求されたり、バディをはじめとするチームでの連携作業など、ムダのない動作と判断が必要となる。そのため訓練がこれらのプールで行なわれている。危険であることを前提に、そのリスクに立ち向かい、軽減し、救助を行なうための訓練の場としてのプール施設であることが求められる。

特殊な訓練用プールも 通常技術の延長で。

例えば水深を例に考えると、水深5メートルのプールの底面1平方メートルにかかる荷重は5トン。小学校用のスイミングプールの水深は0・9～1・1メートルであるから、実に5倍近い水圧

が生じることとなる。では、ヤマハFRPプールの場合、5倍の補強を行なうのか。「通常どおりの技術で対応している」というのがその答えだ。そもそもFRP素材は、その特徴である比強度の大きさと、成形性の自由度は、目的に応じた設備形状への対応を可能としている。訓練用プールというジャンルは、用途についての名称であり、プールとしての本質や性能は基本的にかわらないのだ。

経験と技術を全てのプールに、変わらぬ想いを。

1974年に事業が開始されてから、幼稚園・保育園用プール、アミューズメント、医療用、健康増進、学校や民間スポーツクラブなど、ヤマハのプールは多様な環境に対応している。

特に2001年の世界水泳福岡での世界初のFRP公認特設プール（※1）やJSSのシンクロプール（※2）などは競技用でありながら、その設計思想は今回の訓練用プールに極めて近い施設であるといえるだろう。

特別なプールを、特別な技術を要せずに進める。それは、本来ヤマハFRPプールの技術が、そうした素材強度や耐久性、施工性などの面で、最高のプールを目指して製造されたものだからだ。

海や川などの事故や災害という過酷な環境で、活躍できるスペシャリストを養成するためのプール技術。その技術は、子どもたちや高齢者が使う全てのヤマハプールの中にも存在しているのである。



佐野和夫
財団法人日本水泳連盟会長



鈴木大地
財団法人日本水泳連盟生涯スポーツ担当理事
ソウルオリンピック100m背泳ぎ金メダリスト

海に囲まれた国・日本を象徴する 訓練用プール施設

鈴木 日本は、海に囲まれているわけですが、海岸線の長さは、世界で第6番目。これは、アメリカよりも長いようです。だから日本は、海で泳ぐことが日常の中にあつた。その一方でプール施設も充実していた。生活の中に水泳が深く溶け込んでいるんですね。

佐野 昔は日本人にとって、海で泳ぐことは自然な行為だったわけですね。

鈴木 海上保安庁や警察庁などに、水深が5メートルもある訓練用のプールがあると聞きました。これなどは、海に囲まれた日本を象徴する施設なのかもしれませんね。

佐野 海難救助などの現場では、訓練が成果を発揮します。その訓練施設が備わっていることは、海に囲まれた特殊な環境を持つ日本ならではの特徴といえるでしょう。ただ、こうした水深の深

いプールの施工は、相当な技術精度が求められると思います。

鈴木 そもそも水をしっかりと貯めておくことが難しいでしょうし、耐久性の確保も大事な要素でしょうね。

佐野 日本のプール技術は、世界的にみても屈指のものであるのはまちがいないでしょうね。

日本の水泳の可能性を広げる日本 泳法とオープンウォータースイミング

鈴木 生涯スポーツという視点から水泳を眺めてみると、日本には、古くから「日本泳法」という泳ぎ方があつて、これが近年見直されている傾向にあります。

佐野 現在、日本水泳連盟では、12流



対談

佐野和夫×鈴木大地

水泳は、日本人にとって古くから日常的に使う能力であり水泳の訓練は海と密接に関係し、その出発点がプールだった。しかし、以前に比べ海や川などで泳ぐ機会が減少してしまっていることも、プール施設の普及と進化によるところが大きいといえるだろう。そんな中で、日本泳法が脚光を浴び、海を舞台にした水泳競技オープンウォータースイミングも注目されている。

水泳を学ぶことと、海で泳ぐことの間を、もう一度見つめなおす時期にきているのではないだろうか。財団法人日本水泳連盟会長佐野和夫氏と、生涯スポーツ担当理事鈴木大地氏お二人に、これらの水泳と日本人の関係、そして求められるプールの役割やイメージについてお聞きした。

海に囲まれた国・日本の水泳

水泳人口の拡大に向けてプール施設に求められる豊かな機能・環境

鈴木 生涯スポーツ担当の立場から、もうひとつ発言させてもらうとすれば、ひとりでも多くの人が水に親しむ環境をつくるのが大切であると実感しています。それは、水泳人口を増やすことであり、それによって頂点を目指す人材の可能性が広がることにつながるのだと思います。

佐野 そうですね。まず、水と親しむこと。その中から選手が育っていくという道筋をつくるのが我々の使命でもあります。

鈴木 そのためには、プール施設の充実が大切です。オーストラリアのシドニーオリンピックプールのように、競技用プールの他にレクリエーション用プールをはじめとする様々なプールがあつて、家族全員が楽しめる施設。あのような環境を整えば、もっと水泳が生涯スポーツ

として広がり、その役割を広げていくのではないかと感じています。

佐野 私は、機能性豊かなプール、例えば、50メートルあるいは25メートルプールが可動式の床を備えていて、いくつかのコースが随時アクアビクスや水中ウォーキングなどに使用でき、またある時には水球・シンクロナンなどに必要な時にはなるような柔軟性のあるプールがひとつの理想ではないかと思っています。そうした多機能型プールが全国につくられると水泳人口はもっと増加すると考えます。世界水泳福岡2001の水深3メートルの国際公認特設プールは、当時最高峰の技術として印象に残っています。あれからもうすぐ10年、一握りのアスリートのためだった技術がもっと多くの人のために使われればと思います。

鈴木 そうですね。これからのプールの進化に期待すると同時に、さらなる水泳人口の増加と水泳界の発展を目指していきたいですね。



「泳心二路」後世に。
古橋廣之進氏記念碑が建立。

国立スポーツ科学センター（東京都北区）に、故古橋廣之進氏の生前の功績を称えた記念碑が建立され、7月26日、記念碑の除幕が行われました。

499名の寄付金により製作された記念碑は、古橋氏が2008年に文化勲章を授与された当時の写真と、直筆による座右の銘「泳心二路」、そして2009年4月に出身地の浜松市で開催されたとびうお杯の選手である子どもたちに送ったメッセージが刻まれています。

除幕には財団法人日本体育協会の森喜朗会長、川端達夫前文部科学大臣、財団法人日本水泳連盟佐野和夫会長、古橋恵子夫人らが出席されました。

除幕後に行われた建立祝賀会では森喜朗会長があいさつされ「『泳心二路』そして『魚になるまで泳げ』というメッセージは、敗戦に打ちひしがれた日本に勇気を与えた古橋さんの築いてきた人生そのものであり、人間の教育の礎となる言葉を残された」と話されました。また、列席されていた川端前文部科学大臣に「ぜひ教科書に残してほしい」とも話し、約200名の出席者からも拍手がおこりました。



古橋廣之進氏の記念碑

高さ2・75メートル、幅3・10メートル、厚さ20センチの御影石で作られた記念碑は、日本スポーツ振興センターの協力で正面玄関に向かう専用道路横の植栽の中に立てられ、JISを通うアスリートたちを見守っています。

第二回ワールド・アクアティック・コンベンション開催（ウルグアイ）



（財）日本水泳連盟会長の佐野和夫氏

2010年10月、南米のウルグアイにおいて国際水泳連盟（通称／FINA）主催による「第二回ワールド・アクアティック・コンベンション」（世界水泳会議）が開催されました。

日本からは、（財）日本水泳連盟会長の佐野和夫氏と生涯スポーツ担当理事である鈴木大地氏がこの国際会議に参加し、積極的な意見・要望などを述べました。

世界202ヶ国が加盟するFINAによるはじめての大規模なコンベンションとあつて、総勢400名を超える各国のメンバーが出席、3日間の大会は盛大に開催されました。

この中で日本は、現在の日本の水泳界を取り巻く環境や最新の動向をはじめ（財）日本水泳連盟の運営体制や組織としての管理体制などを紹介。世界の中での立場に則し、水泳界の発展に貢献する姿勢を示しました。



今回の会議では、スポーツ産業界との関係性を良好に保ちながら水泳界の展望とその実現についてコンセンサスが図られ、この先の世界の水泳界の発展に向けて、その指針が示されました。

運動の喜びを持ちつづけよう
「100歳までウォーキング」が刊行



100歳までウォーキング

社団法人日本フットネス協会から、本誌でもおなじみの宮下充正氏、医学博士の矢野英雄氏、臨床催眠療法士・ウエルネスコーチの木蔵シャブエ君子氏による共著「100歳までウォーキング」が刊行されました。運動遂行が不自由である障害者の運動意識の高さを再認識し、「障害者向けのフットネス向上の運動プログラム」としてまとめられたものです。

歳をとっても適切に運動することで本人の治療能力を維持、または回復するための努力までも触れられ、わかりやすく解説されています。1冊500円（送料別）まよめの購入がお得です。詳しくは、社団法人日本フットネス協会（電話03-3818-6939）まで。

アイススケートリンクが
5年目のオープン。



2010年度広告

尼崎スポーツの森では、今年もメインプール棟内にアイススケートリンクが登場し2010年10月1日にオープンしました。可動床プール底面をプールサイド高さまで上げ、特設リンクとして2011年5月8日まで営業します。期間中は通常営業に加え、レディースDAYを設けるなど、お得にご利用しやすいサービス・プランを設けています。また、一般利用だけでなく、24時間対応のリンクの貸出しや、アイスホッケー利用も可能となっております。幅広い要望に対応しています。

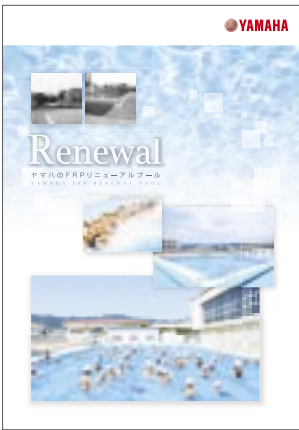
学校プールのリニューアルを詳しく
リニューアルプールカタログを刷新

学校プールのヤマハFRPリニューアル工法を紹介した、最新カタログが完成しました。学校プール建設がピークだった1970年代から40年が経過し、全国の学校プールは老朽化や工期、費用などの課題が多く、安全なプール環境の整備が進みにくい状況となっています。

このカタログでは、既存のプールの課題を整理し、ヤマハ独自のリニューアルプログラムの立案までの流れ、そしてその施設の環境ごとに適したリニューアル工法の説明と、長所となるポイントを、図や写真で解説しています。

また、全国各地のさまざまなプールリニューアル事例を紹介し、近年のエコ技術や耐震技術などの新たな付加価値にもふれた内容となっています。

ご希望の方は、お近くの営業所にお問合せいただくか、ホームページからお申し込みください。http://www.yamaha-motor.jp/pool/



ヤマハ発動機水泳部
実業団水泳大会で大健闘。

「第61回日本実業団水泳競技会」が2010年7月31日、8月1日の2日間にわたり、京都市西京極総合運動公園プール

ヤマハ発動機が管理・運営する
屋外プールが今年の夏も大盛況。



尼崎スポーツの森「アマラーゴ」

ヤマハ発動機が管理・運営する施設「デカバトス in Rokko Island」と「アマラーゴ」（尼崎スポーツの森内）、7月の月上旬から9月上旬まで屋外プール施設の営業を行ないました。

今年は全国的な猛暑が続きましたが、キヤクターを使ったイベント開催や、プロモーション活動に力を入れたことで、

期間中の来場者数は昨年を大きく上回り、「デカバトス in Rokko Island」では7月10日から9月12日までの営業期間で149,622人の来場者があり、前年比を31%アップ。さらに開業4年を迎えた「アマラーゴ」では7月3日のオープンから9月5日までの営業期間で97,424人と多くのお客様にご来場いただき、前年比44%アップを達成するなど、双方大変多くの来場者で賑わいました。



デカバトス in Rokko Island



ヤマハ発動機水泳部選手団

／京都アクアリナにて開催され、全国の370を越える事業所、約1700名の選手が参加し、熱戦が繰り広げられました。当社の選手団は、静岡県の実業所として最大で、県予選を勝ち抜いた14名の選手が、過去最高の19種目にエントリーしました。

創部7年目ながら、20代から50代と幅広い年齢層という強みを活かし、着々と実力を付けてきています。

中でも、特別選手枠を持つ強豪チームを相手に、30歳以上100m平泳ぎで小池選手が優勝したほか、50m平泳ぎでも6位入賞。年齢別200mメドレーリレーでは、小池、高橋、多久島、杉山の4選手の活躍で見事6位入賞を果し、年齢別の部総合9位という好成績を残しました。

また、他の選手も日々の自主トレーニングや、毎月1回行なわれる合同練習の成果を存分に発揮し、ほぼ全員自己ベストを記録。

昨年の宮城大会に比べ、飛躍的に伸びた成績を踏まえ、末包（すえかね）淳一監督は「来年の大会に向けてさらに練習に励み、1ポイントでも上位を目指したい」と力強く語りました。



30歳以上100m平泳ぎで優勝した小池選手表彰式（写真中央）

水夢人

いずみ まさふみ
泉 正文 氏財団法人 日本体育協会常務理事
財団法人 日本水泳連盟 専務理事

Relay Talk Vol.13

名実ともに日本の
生涯スポーツ「水泳」の
発展を支えたい。

～日本体育協会創立100周年の節目に～

日本体育協会100周年記念
事業がはじまった明治44年（1911年）に、国民の
スポーツの振興とオリンピック競技会
への参加を念頭において、日本体育協
会が設立されました。あれから100年。平成23年は、
ちょうど創立100周年を迎える節
目の年になります。その記念すべき年
に日本体育協会の事業にかかわるこ
とができ、大変誇りに感じています。そのスローガンは、「日本のスポー
ツ100周年 誇れる未来にあたたかな
一歩」と定められました。本年10月の
福島でのシンポジウムを皮切りに、京
都・広島を経て東京での総括シンポ
ジウムまでイベントが続き、平成23年アクア・ウォーキング（その1）
水中歩行の効果とプール

アクア・ウォーキングという名称のはじまり

「勝ち負けを争わない、記録を競わない市民のスポーツを」という、たくさんの方々の声があがりました。それに答えて、1968年ヨーロッパのドイツを中心に、4カ国が「国際市民スポーツ連盟（IVV）」を発足させました。運動種目は、個人で参加できるウォーキング、サイクリング、スイミング、クロスカントリー・スキージングでした。40年を過ぎた現在では、ヨーロッパ、アメリカ、アジアなどから、50を超える国々が参加するという大きな国際組織にまで発展しているのです。

国際市民スポーツ連盟は、2年に1回世界各地で「IVVオリンピックアド」と呼ばれる国際大会を開催してきました。毎回世界各国から数千人が参加する比較的大規模な大会となっています。

その第11回大会は、ヨーロッパから初めて離れて、日本の富士山北麓で、2009年初夏4日間にわたって開催されました。その際、連盟の副会長であった筆者が、泳げない人でも参加できる『水中を歩く』という種目を増やしたらどうかと提案しました。役員の賛同を得て、『アクア・ウォーキング』という名称で正式種目として採用されることが決まったのです。そして、世界の多くの人たちの知るところとなったのです。

当初は、プール利用者のほとんどは水泳をしていたので、歩く人は邪魔者扱いを受けていました。ところが、歩く人が増えるにしたがって、歩く専用のコースが設定されるようになったのです。



も歩ける構造ではなかったからです。

しかし、富士山北麓で開催された大会では、

たくさんの方々の参加者が、スイミングとともに歩行用円形の室内温水プールで300m、500m、1000mという距離を選んで、楽しそうに歩いていました。

リハビリテーションから健康増進へ

水中を歩く運動は、整形外科でのリハビリテーションとして、病院内に造られた小さなプールで以前から行なわれてきました。ふつうの人むけのアクア・ウォーキングは、1980年代に歩行障害を有する人、あるいは、肥満でいて陸上での運動が困難な人でも、運動が可能であるという理由から、筆者がNHKの番組で取り上げてもらい、たくさんの方々の視聴者が試みるようになり、水中で歩く人がしだいに増えていったのです。

当初は、プール利用者のほとんどは水泳をしていたので、歩く人は邪魔者扱いを受けていました。ところが、歩く人が増えるにしたがって、歩く専用のコースが設定されるようになったのです。



たり、レールの両側に手すりや設けたり、といった工夫がなされアクア・ウォーキングが実践しやすいようになりました。

歩く専用レーンの誕生

しかし、それまでのプールは、浅いといっても1m20cmぐらひはありましたから、背の低い人は歩きづらい思いをしていました。そこで、水中に台を入れて、歩きやすいようになりました。また、排水の関係からプールの底は水平ではなく、中央部分が深いという構造から、背の低い人は途中から歩けないといった不都合がありました。

また、プールの底も滑りやすいので速く歩けない、あるいは、タイルの張り合わせ部分に刻みがあつて、足の裏を傷めやすいものでした。同じように、からだの安定を保持するための手すりがないプールがほとんどでしたから、初めて水中を歩く障害者はプールサイドに手を添えて沿って歩くしかなかったのです。

そこで、ふつうの市民たちが健康・体力の保持増進を目的にした新しいプールが建設されるときには、プールの底を滑りにくい表面にし

PROFILE

みやした みつまさ
宮下 充正
（財）日本水泳連盟 参与
東京大学名誉教授
【最近の主な著書】
『子どものスポーツと才能教育』02（大修館書店）
『子どもに体力をとりもどそう』07（杏林書院）
『競技志向と健康志向のスポーツ科学』09（杏林書院）

7月16日には祝賀式典の開催を計画。さらに、平成23年度末には、競技記録DVDを盛り込んだ記念誌の編集・発行を予定しています。

日本の競技力を支える原点として「国体」がある

日本体育協会の事業として昭和21年にはじまった国民体育大会（以下、国体）は、今なお、国内において最も権威があり、スポーツの象徴として重要な役割を担っています。

国体の本大会への参加者は現在およそ25,000人、予選参加者にとつては、実に30万人にも達します。国体開催によって、全国津々浦々に多くの競技施設がつくられ、同時に競技の普及や選手の育成が図られました。その点で国体は、今も昔も日本のスポーツの競技力を支える原点を担っていることに間違いありません。

また、近年ではジュニア世代（中学3年）にも門戸を開放。将来、世界と闘う若い人材を支え、発展させていく姿勢を打ち出しています。

水泳は日本人にとって名実ともに生涯スポーツ

あらゆるスポーツ競技の中で、水泳ほど広く親しまれている競技は、他にないだろうと私は感じています。

現在、（財）日本水泳連盟に登録している水泳競技者数は約12万人。こ

れに「日本マスタース」の競技者を加えると、およそ16万人になります。さらに全国にあるスイミングクラブやスクール、一般のプールなどを含めると、その普及人口は数えきれないほど。これは、世界にはない日本独自のスポーツ文化であり、水泳が生活に根付いたスポーツ競技であることがわかります。これほどまでに泳ぐことが浸透しているという調査報告も出ています。

こうして、広くプールに親しみ、水泳を身近なスポーツとして楽しむ人が増えたことで、水泳は、名実ともに生涯スポーツとして位置づけられるようになりました。近年では、高齢者が気軽に参加できる水中ウォーキングなどの新しいジャンルも人気を博しています。これからも水泳はいろいろな可能性をもったスポーツとして国民に親しんでいただくことが必要だと思います。（財）日本水泳連盟の担当としても、このような状況に対して、より一層の条件づくり・環境づくりを推進していきたいと考えています。

その具体案のひとつに、日本のスポーツ界が熱望しているものとして、スポーツ庁の創設があります。政府への働きかけを継続して、国内外を問わずスポーツ行政でも積極的な施策がなされるような環境整備を進展させたいと考えています。私もこうした今後の動きに役を担えるよう努力していきたいと思っています。